

大塚知昇（2025 年度学会賞（著書）受賞）

この度は、拙著 *Radical Free Merger* に日本英語学会学会賞（著書）という名誉ある賞を賜り、身に余る光栄でございます。まずは、私を研究の道に導いてくださった大学院時代の指導教官の西岡先生をはじめ、九州大学英語学・英文学研究室の先生方、先輩方、後輩達、お世話になった九大外の皆様に心より御礼を申し上げます。そして何より、理論的な議論も多くなっている拙著を入念にお読みいただき、ご審査いただいた審査委員会の皆様に心より感謝申し上げます。

本書は、項と付加詞の違いに関連し、Chomsky (2004) で提案された *pair-Merge* という操作のあり方について考察したものとなります。本来理論としては、想定する操作は少ない方が良くすれば、*pair-Merge* もいずれは無くなるべき想定かもしれません。しかしながら、言語に付加詞要素がある以上、項ではなく付加詞を導入する何らかの仕組みは必ず存在するはずであり、Chomsky (2004) の時点で *pair-Merge* という操作が想定されているのであれば、ひとまずその操作を最大限に活用してみようということで、一種の試みとして進めてきた研究のまとめとなります。*set-Merge* は項要素に、*pair-Merge* は付加詞要素に適用されるという伝統的な立場に対し、状況が許せば *pair-Merge* を経た項要素や、*set-Merge* を経た付加詞要素があっても良いという提案のもと、項と付加詞の間の境界的な現象を説明することを目指してきました。先述の通り、いずれは *pair-Merge* も何らかの別の仕組みから導かれて消去されるべきであると思いますが、その際には代替の想定によって、どのような形でこれらグレーゾーンの現象をとらえられるようになることを願っております。

本書は約 7 年の執筆期間を経ましたが、私事ながら今振り返りますと、この 7 年は結婚から職場の異動、新型コロナウイルスの流行等、濃厚なイベントと並行してきており、気づけば随分遠くまで来たような不思議な気持ちがしております。その間も、家族をはじめとし、アカデミックな世界の内外を問わず、本当に多くの方に支えられて何とかやってまいりました。まだまだ未熟な身ではございますが、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

最後に再び私事ながら、拙著は 2023 年の出版であります。これは私の息子の生まれ年と一緒です。息子と拙著は同い年として、これから齢を重ねていくことになります。本は物理的にも内容的にも古くなっていきますが、息子はこれから成長していく一方だと思われます。今はありがたい授賞により拙著の方が先に評価をいただきましたが、いずれ息子が何らかの形で超えていくのかなと思うと、なんとも不思議な気持ちであります。

改めましてこの度は誠にありがとうございました。



息子近影（2025 年）